飛田雄一

コロナ自粛エッセイ・番外編②

「ちょうちょう・はっし」

●一

「丁々発止」では、ない。「蝶」と「鳥」の話だ。

「蝶」。かわいいと思うが、特別の興味はない。私の幼年期、私は、母が勤める石井幼稚園に住んでいたので、庭があった。ミカンの木に虫がついたりしたら、枝ごととってきて、飼ったこともある。どんな蝶が、あついは蛾（が）が生まれたのか、一匹も記憶がない。

ハイキング好きの私は、自宅の鶴甲団地から六甲山に登る。あるとき、大きな蝶をみつけた。Facebook にアップした。蝶の名前は分からなかった。今なら「グーグルレンズ」で一発にわかる。（このレンズの説明は省略）

するとすぐにコメントがあった。「アサギマダラ」だという。初めての名前だった。フィリピンあたりから日本に飛んできたのだという。感動した。このあたりに自生する草に卵を産むという。が、先日、テレビを見ていたら、北海道に行ったアサギマダラは、別の草に止まっていた。そりゃ、アサギマダラも選り好みはできないのだろう。

南の国から風にのってやってくることにロマンを感じた。が、すぐそのあと、どうして帰るのだろうかと心配になった。なんとなく、赤道から風が北半球に吹き上がるのはイメージできる。でも、本人あるいは、その子どもたち（おそらく子どもだろう）は、南の国に帰らなければなら

ない。そんな風があるのだろうか？　まさか自力で、飛んでいくのではないだろう。こんなことを考えると寝られなくなるので、思考停止とした。彼／彼女らもなんとかやっているのだろう。

●二

私の蝶の先生は、森地重博さんだ。能勢をフィールドに蝶の研究をしている。関連の著書もある。私が鶴甲団地に引っ越してきた最初の日に出会った人だ。今は、大阪に移られたが今も交流がある。私の鶴甲への引っ越しの日、わが家は、「食品公害を追放し安全な食べものを求める会」（なんと長い、通称「求める会」）のトラックでやってきた。そのとき、住民たちにいぶがしかられた。でも、森地さんはちがっていた。

家族ぐるみの付き合いで、いろんなところにいっしょに行った。わが家は娘がひとり、森地家は、娘さんがふたり。上がうちの娘と同級で、もうひとりは2つ下だ。四〇戸の団地だが、当時、そこに同級生だけで5人もいて、毎日にぎやかだった。今は、子どもの声がしたら、うれしくて、窓からのぞいたりする。

どちらも山好きで、北アルプスに登った。娘が小学校低学年のころ、上高地、涸沢から穂高岳山荘に登った。三人の子どもは、しんどい、しんどいとぶーぶーいいながら、山小屋が見えたら、走り出した。

夕食後、みんなでトランプをした。二、三名の登山客も加わった。おもしろかった。夜中、娘が目を覚ましたとき、そのトランプのおじさんが、起き上がって、変顔をしてくれたそうだ。怖かったが、おもしろかったそうだ。次の日、台風がやってきた。われわれは穂高登頂をあきらめて、朝からトランプをしていた。そのおじさんグループは、完全装備で山頂に向かった。窓から、「バイバイ」とふつうの顔であいさつしてくれた。

どう考えても、おもしろすぎるおじさんだ。たかがトランプなのに、子どもたちは爆笑につぐ爆笑だった。あとで私は、思い至った。「竹中直人」だ。そのあとブレイクしたが、そのときはそれほどの有名人ではなかった。その後、思い出すたびに、私には竹中直人であるという確信が増幅している。娘に、「〇年前、台風の日に穂高岳山荘で女の子三人と遊んでくれたのは竹中直人さんではありませんか」という手紙をテレビ局に出したらと言っているが実現していない。

森地さんとは、神戸学生青年センターの企画で、済州島漢拏山に登ったこともある。

彼のフィールドでもある能勢の三草山にも登った。近くにいた私の高校機械体動部の先輩・成川順さんと山頂で合流した。弁当を食べた。そのとき順さんの娘さんも来ていた。成川彩さんだ。朝日新聞の記者をし、その後、韓国と日本で、韓国映画の専門家として活躍している。ずいぶん前に、むくげの会のゲストディ「法定通訳者」をテーマに来ていただいたことがある。最近でもＺＯＯＭでゲストディにソウルから出演していただいた。むくげの会の韓国合宿という名の単なる旅行で、ソウルの飲み屋でお目にかかったりもしている。

●三

わが家に蝶の絵の掛け軸がある。韓国でいただいた絵だ。いきいきと蝶が飛んでいる。適当にいろんな蝶のいろんな姿を描いているものだと思っていた。が、森地さんに見ていただいたら、ちゃんとした種類も特徴も正しい蝶だとのことだ。何匹か名前を聞いたが忘れてしまった。こんどグーグルレンズで（まだでてきた、ごめんなさい）調べてみよう。

●四

次は、鳥。これにも特別の関心はなかった。が、これは、関心をもった。といっても、最近また急速に薄れている。

「さんだわらわな」

ご存じだろうか。さんだわらは、お米の俵の上下をふさぐ丸い形状のもの。それで、スズメを捕まえるのだ。釣り糸でスズメがお米を食べようとそこに降りてくる。食べる。飛び立とうとすると釣り糸に引っかかってつかまる。

でも、捕まえられなかった。

籠と棒をセットして、そのなかにスズメが入る。紐を引っぱると蓋（ふた）が落ちてつかまる、というのも作った。が、だめだった。

スズメを大量に捕まえたのは、神戸大学時代だ。農学部には温室があった。入れないようにしていたが、中にたくさんスズメがいた。お米をゆったりと、食していた。

これを「退治」したのである。テニスラケットをもった四人が四隅にたつ。スズメをたたき落とすのである。といっても軽くたたいて脳震とうをどんおこさせる。どんどん、どんどんつかまえた。私は、その焼きスズメをそこでは食べていない。料理人はだれだっただろう。

●五

そして、あるときバードウオッティングにめざめた。

愛用のペンタックス二眼レフカメラを思い切って売った。三宮のカメラ店が閉店したというニュースを聞いて、これは早く売らなければと思い、元町まで行った。本体と交換レンズ、これは要りませんというフィルターまで全部売って（？）五万円ほどになったのではないかと思う。

そして、ミラーレスカメラを買った。これが正解だった。デジタルカメラで何枚でも写せる。そして、バードウオッティングだ。いつもカメラを持ち歩いて、鳥を追いかけた。声はすれども姿はみえぬ、という鳥も多い。ウグイスなど、チラッとみたことはあるが、カメラでとらえたこ

とはない。

気に入った写真を年賀状に使ったこともある。でも、私の年賀状は、びっくりするほど文字数。過ぐる一年をふりかえり、次の一年を展望するのだ。鳥だけではものたりない。鳥の年賀状はすぐ卒業した。

あるときは、阪急六甲駅構内のツバメを追いかけた。ずっとみていると楽しい。子どもが餌をねだった大きい口をあけている写真がベストだ。横にチラッと親鳥がうつるのがいいのだが、なかなかそうはいかない。親鳥が邪魔をするのだ。習作はすでに Facebook にはりつけたので、ご覧になったかたもおられるだろう。

●六

神戸大学の旧教育学部に小さな田んぼがある（学部の名前はよく変わるので正式名は省略）。剣道場（六甲台）の隣だ。ツバメは田んぼの泥を利用して巣をつくるのだ、と聞いていた。なら、都会のツバメはどうなんだといつもつっこんでいたが、そこの小さな田んぼでその現場を目撃した。

ちょうど田んぼに水を引いたときにそこに出くわした。水面すれすれをツバメが乱舞するのである。三〇匹はいたか（少々オーバーか？）。なかには、ちゃんと泥を食べている（？）のもいる。

例のカメラで写真をとりまくった。が、まさに、乱舞。ピントが合うわけがなく、それらしいのが二、三枚あっただけだ。でもうれしかった。水をはると地中の虫も飛びだしてくるので、それを目当てに来ているのかもしれない。

その後、田植えの時期にはそこをのぞくようにしている。が、それ以降、その乱舞を見ることはない。そして去年今年は、コロナのためその田んぼも休んでいる。残念だ。

■あとがき

「コロナ自粛エッセイ」その七まで書いた。七のあとがきに「もう少しこのエッセイが続くことになる」と書いた。が、やめることにした。きりがないのだ。実は、この一二月に社会評論社から一～七が単行本として出版されることになった。冊子版は無料だったが、単行本版は有料、覚悟をよろしく。

だが、エッセイがなくなるとさびしい。で、方向転換して、趣味系に移ることにした。私は「ゆうさんの自転車／オカリナ・ブログ」を作っているが、もともとこれはオカリナエッセイを書きたいと思って作ったものだ。そのエッセイはあまり書かなかったが、ここで一挙に書くことにしたのだ。

この趣味系路線では、実はまだテーマがあるのだ。乞うご期待。アメリカ大統領選も終わりトランプ時代も終焉したので、あとは、コロナ時代が終わることを願うのみである。

二〇二〇年一一月一〇日　　飛田雄一

著者　飛田雄一（ひだ　ゆういち）
一九五〇年神戸市生まれ。神戸学生青年センター理事長、むくげの会会員など。著書に『日帝下の朝鮮農民運動』（未来社、一九九一年九月）、『現場を歩く 現場を綴る―日本・コリア・キリスト教―』（かんよう出版 二〇一六年六月）、『心に刻み、石に刻む―在日コリアンと私―』（三一書房、二〇一六年一一月）、『旅行作家な気分―コリア・中国から中央アジアへの旅―』（合同出版、二〇一七年一月）、『再論 朝鮮人強制連行』（三一書房、二〇一八年一一月）『時事エッセイ―コリア・コリアン・イルボン（日本）―』（むくげの会、二〇一九年五月）、『阪神淡路大震災、そのとき、外国人は？』（神戸学生青年センター出版部、二〇一九年七月）ほか。
コロナ自粛エッセイは、①極私的 べ平連神戸事件顛末の記、②極私的 阪神淡路大震災の記録、③極私的 「コリア・コリアンをめぐる市民運動」の記録（二〇二〇年七月）、④極私的 南京への旅・ツアコンの記（二〇二〇年八月）、⑤極私的 「青丘文庫」実録、⑥極私的 「六甲古本市」全？記録（二〇二〇年九月）、⑦極私的 ゴドウィン裁判 初・原告団長の記（二〇二〇年一〇月）。

コロナ自粛エッセイ・番外編②
「ちょうちょう・はっし」

二〇二二年八月三〇日発行
著者・発行者　飛田雄一　hida@ksyc.jp
〒六五七―〇〇一一
神戸市灘区鶴甲四丁目三の一八の二〇五